

## 税金と復興

北見市立南中学校 三年 小林 果央

平成三十年九月六日、北海道の胆振東部で震度七の地震が発生した。私の地域は幸い大きな被害はなかったが車のテレビで見た光景に当時九歳だった私は衝撃を受けた。土砂崩れで家が崩壊し、液状化現象で道路がどろや土で覆われる。また家族を失い泣き叫ぶ姿は今でも忘れられない。

避難している人を見てこの人たちはどうなってしまうのだろう、このまま一生避難所で過ごすのかと感じていた。

そんなとき、仮設住宅が建てられたというニュースを知った。そこで私は疑問に思った。仮設住宅を建てるお金は誰が払っているのだろうか、と。

その答えは税金だった。

私は、税金と聞くと消費税や公共施設に使われていることなどしか知らなかった。しかし、税金は仮設住宅や道路の補修などにも使われていると知った。

また、災害時にみんなを助ける自衛隊も税金によって活動していると知り、自分たちが納めていた税金が少しでも復興の力になっていると分かり嬉しかった。

そして、最大一万六千六百四十九人だった避難者は平成三十年十二月にはゼロ人になり、仮設住宅の約二百四十四戸が整備され、たくさんの人が暮らし安心できる場を与えた。

私はこのことを知るまで税金はいらないと思っていた。

なぜ百円ショップの商品が百十円なのか、将来今よりも税金と関わっていくと思うとめんどくさかった。

しかし今、学校の教科書が無料で配布されていることや、病院で治療を受けることができるのは税金のおかげだ。そして災害の復興、そして私の大好きな北海道の復興のための税金だ。私は税金に対しての考えを変えることができた。税金は私たちの生活になくてはならない存在で大切なものだと思えるようになった。

私はまだ税金を納めていないし、税金についても知らないことが多くある。

これからさらに税金について理解し、多くの人に共有していきたい。

また、あと数年で税金を納めるようになる。その時には私の出す税金がさらなる復興の手助けになることを願っている。